

授業および部活動における傷害発生について

Injuries during Class and Extracurricular Activities

鳥賀陽 信央 及川 佑介 櫻田 淳也 永井 将史
長谷川 千里 渡辺 博之 山田 浩二郎

UGAYA Nobuhisa OIKAWA Yusuke SAKURADA Junya NAGAI Masashi
HASEGAWA Chisato WATANABE Hiroyuki YAMADA Kojiro

【要約】

学校教育、体育・スポーツに内在する危険性の理解や活動参加者自身の予防や対策などの注意喚起の一助となることを目的に、本学で発生している傷害について学生部に提出された学研災申請書を基に集計を行った。

その結果、傷害発生率は全国平均(学研災加入者)0.57%に比べ、本学は全申請4.8%、保険適用有2.9%と約6~8倍であった。傷害発生状況は授業中(体育実技のみ)で全国平均12%に比べ、本学は全申請29%、保険適用有45%と約3~4倍であった。これらは主な要因として、体育大学の特色でもある参加人数の多さ、競技そのものの難易度や危険性が考えられた。競技カテゴリ別では授業、部活ともに記録・採点系、球技・ネット型、球技・混戦型が高い傾向にあった。これらは参加人数の多い種目(授業においては必修授業)、競技そのものの難易度や危険性が高い種目によって差が出たものと考えられた。受傷部位では傷害発生率の高い部位として膝と足首が挙げられた。

本学は体育・スポーツの指導者を育てることを目的に独自のカリキュラム内容となっている。また、多くの学生が部活にも参加している。その結果として、一般的な他の大学(学部)に比べ、傷害発生率が高いと考えられた。このことを教員(指導者)はもちろん参加

者である学生も十分理解し、各自の立場でその予防に取り組む必要がある。

【目的】

学校教育における傷害の発生は理想としては防止されるべきものだが、実際に防ぐことは非常に難しい。特に体育・スポーツにとって大きな問題であり、体育・スポーツを専門とする本学にとっても重要な課題である。

そこで本学で発生している傷害について集計し、その傾向を知ることで、学校教育、体育・スポーツに内在する危険性の理解や活動参加者自身の予防や対策などの注意喚起の一助となることを目的とした。

【方法】

対象は平成24年度から平成28年度に学生課に提出された「学生教育研究災害傷害保険(学研災)」の保険金支払申請書のうち、平成24年4月1日~平成29年3月31日までに発生した427件を集計対象とした。申請書の情報は適正に管理され、研究で個人が特定されないよう配慮された。

前述の期間の学研災申請書の記載内容から学部、傷害発生日、傷害内容(診断名、部位)、活動状況(授業・クラブ名など)、通院・入院日数、治療

期間、学研災保険適用の有無を集計した。傷害内容、活動状況については、申請書の記載から同一の内容と思われるものは整理した。集計した結果で学部については大学体育学部(大学)、短期大学保健体育学科(保体)、短期大学児童教育学科(児教)と全学科平均(全体)で表記した。

なお、本研究は東京女子体育大学の倫理審査委員会の承認を得た上で行われた。また、本研究は平成29年度東京女子体育大学「共同研究」の助成を受け行われた。役割分担として研究統括を鳥賀陽、方法とデータの集計を及川と永井、結果と考察を櫻田、長谷川、渡辺が主に担当した。全体における医学的な知見について山田が担当した。

【結果】

表1は学研災の全申請について傷害発生件数をまとめたものである。傷害発生率は発生件数(申請件数)を学生数で除して求めた。全体平均として在籍学生のうち、4.8%(およそ100件/年)に傷害が発生していた。

表2は全申請のうち、学研災の保険適用が認められたものについて傷害発生件数をまとめたものである。全体平均として在籍学生のうち、2.9%に傷害が発生しており、保険が適用されたのは全申請件数のうち約62%程度である。

表3は学研災加入者全体における傷害発生率である。これは公益財団法人日本国際教育支援協会が発行する「平成27年度学生教育研究災害保険

表1. 傷害発生件数(全申請)

学生数は各年度の5月時点の在籍者数 傷害発生(%)は傷害発生(件)/学生数(人)

大学	学生数	傷害発生	保体	学生数	傷害発生	児教	学生数	傷害発生	全体	学生数	傷害発生
年度	(人)	(件) (%)	年度	(人)	(件) (%)	年度	(人)	(件) (%)	年度	(人)	(件) (%)
24	1404	71 5.1%	24	96	0 0.0%	24	152	4 2.6%	24	1652	75 4.5%
25	1474	49 3.3%	25	134	2 1.5%	25	147	1 0.7%	25	1755	52 3.0%
26	1498	54 3.6%	26	153	4 2.6%	26	187	6 3.2%	26	1838	64 3.5%
27	1563	98 6.3%	27	129	7 5.4%	27	175	3 1.7%	27	1867	108 5.8%
28	1564	127 8.1%	28	111	0 0.0%	28	154	1 0.6%	28	1829	128 7.0%
計	7503	399	計	623	13	計	815	15	計	8941	427
平均	1501	80 5.3%	平均	125	3 1.9%	平均	163	3 1.8%	平均	1788	85 4.8%

表2. 傷害発生件数(保険適用有)

学生数は各年度の5月時点の在籍者数 傷害発生(%)は傷害発生(件)/学生数(人)

大学	学生数	傷害発生	保体	学生数	傷害発生	児教	学生数	傷害発生	全体	学生数	傷害発生
年度	(人)	(件) (%)	年度	(人)	(件) (%)	年度	(人)	(件) (%)	年度	(人)	(件) (%)
24	1404	48 3.4%	24	96	0 0.0%	24	152	2 1.3%	24	1652	50 3.0%
25	1474	33 2.2%	25	134	1 0.7%	25	147	1 0.7%	25	1755	35 2.0%
26	1498	36 2.4%	26	153	1 0.7%	26	187	5 2.7%	26	1838	42 2.3%
27	1563	60 3.8%	27	129	3 2.3%	27	175	1 0.6%	27	1867	64 3.4%
28	1564	72 4.6%	28	111	0 0.0%	28	154	1 0.6%	28	1829	73 4.0%
計	7503	249	計	623	5	計	815	10	計	8941	264
平均	1501	50 3.3%	平均	125	1 0.7%	平均	163	2 1.2%	平均	1788	53 2.9%

年次報告」を基に著者らが作成したものである。大学、短大、大学院の全体平均で学研災加入者のうち0.57%であり、本学の傷害発生率(全申請4.8%、保険適用有2.9%)と比べ、非常に低値を示した。

表4は傷害発生状況についてまとめたものである。本学は授業が全申請29%、保険適用有45%の傷害

発生率であり、授業内容は全て体育実技であった。それに対して学研災加入者(体育実技のみ)は12%であった。部活はいずれも5、6割であった。

表5は全申請における競技カテゴリ別にまとめたものである。授業では記録・採点系が46%(うち陸上25%、器械運動52%)、球技・ネット型が9%(うちバレーボール90%)、球技・混戦型が23%(うちハンドボール40%、バスケットボール60%)と参加人数の多い必修授業がある競技カテゴリで高い傾向にあった。部活では記録・採点系が41%(うち陸上26%、器械運動21%、新体操11%、トリアスロン11%)、球技・ネット型が16%(うちバレーボール60%、バドミントン11%、ソフトテニス18%)、球技・混戦型が29%(うちハンドボール29%、バスケットボール38%、サッカー17%)と部員数が多い種目、競技そのものの難易度や危険性が高い種目が多い競技カテゴリで高い傾向にあった。

表3. 傷害発生率(学研災)

公益財団法人 日本国際教育支援協会が発行する「平成27年度学生教育研究災害保険 年次報告」を基に作成

学研災 年度	傷害発生率			
	大学	短大	大学院	全体
24	0.60%	0.47%	0.31%	0.57%
25	0.59%	0.49%	0.30%	0.56%
26	0.62%	0.47%	0.30%	0.59%
27	0.60%	0.43%	0.30%	0.57%
28	データなし			
平均	0.60%	0.47%	0.30%	0.57%

表4. 傷害発生状況

学研災データは公益財団法人 日本国際教育支援協会が発行する「平成27年度学生教育研究災害保険 年次報告」を基に作成(平成27年度の実績のみ)

本学5年間(全申請)			本学5年間(保険適用有)			学研災(平成27年度のみ)		
活動状況	傷害発生		活動状況	傷害発生		活動状況	傷害発生	
	(件)	(%)		(件)	(%)		(件)	(%)
授業	123	29%	授業	119	45%	授業	3508	22%
部活	284	67%	部活	132	50%	(体育実技のみ)	(1900)	(12%)
その他	20	5%	その他	13	5%	部活	9862	62%
計	427		計	264		その他	2553	16%
						計	15923	

表5. 競技カテゴリ別(全申請)

	傷害発生			傷害発生	
	(件)	(%)		(件)	(%)
授業			部活		
記録・採点系	56	46%	記録・採点系	117	41%
対戦・武道系	6	5%	対戦・武道系	20	7%
球技・ネット型	11	9%	球技・ネット型	45	16%
球技・ベースボール型	1	1%	球技・ベースボール型	20	7%
球技・混戦型	28	23%	球技・混戦型	82	29%
野外活動系	7	6%	野外活動系	1	0%
その他(実技系)	14	11%	計	285	
計	123				

表6は全申請における受傷部位をまとめたものである。傷害発生率の高い部位として膝と足首が挙げられる。なお、膝の傷害の50%が治療期間180日(半年)以上であり、これは治療期間180日以上の傷害のうちの82%を占めている。これに対して足首の傷害は70%が治療期間30日(1か月)以内となっている。

表6. 受傷部位(全申請)

部位	傷害発生		部位	傷害発生	
	(件)	(%)		(件)	(%)
全身	6	1%	手指	43	10%
頭	22	5%	股	1	0%
顔	26	6%	大腿	14	3%
首	11	3%	膝	109	26%
胸腰部	23	5%	下腿	13	3%
肩	18	4%	足首	87	20%
肘	16	4%	足指	30	7%
前腕	1	0%	病気	1	0%
手首	5	1%	異常なし	1	0%
			計	427	

【考察】

学校教育、体育・スポーツに内在する危険性の理解や活動参加者自身の予防や対策などの注意喚起の一助となることを目的に、本学で発生している傷害について学生部に提出された学研災申請書を基に集計を行った。

傷害発生率(表1, 2, 3)について本学は全国平均に比べ、非常に高い結果(全申請で約8倍、保険適用有で約6倍)となった。この要因として本学は体育大学であり、授業内に体育実技が多く含まれること、部活動の参加者が多いことが挙げられる。傷害発生状況(表4)で見ても全国平均に比べて授業中(体育実技のみ)が多く含まれ、カリキュラム的に他の一般的な大学に比べて傷害発生率が高いことが示唆される。また、部活中は本学、全国平均ともに5, 6割の発生率であり、授業中(体育実技のみ)と合わせて(合計約8割程度)スポーツ活動そのものの危険性も表していると考えられる。なお、今回の傷害発生件数はあくまでも学研災の保険申請があったものの集計で

ある。実際には保険の申請を見送っているような傷害(軽度の捻挫、突き指、擦過傷など)も発生していると推測できる。その件数も他の一般的な大学より多いことは十分予想される。

競技カテゴリ別(表5)では授業、部活ともに記録・採点系、球技・ネット型、球技・混戦型が高い傾向にあった。これらは参加人数の多い種目(授業においては必修授業)、競技そのものの難易度や危険性が高い種目によって差が出たものと考えられた。本学は体育大学であるため、必然的に授業および部活の競技水準も求められる。また、種目によっては道具や環境による危険性、他者の介入によって引き起こされる不確定要素による危険性なども考えられる。今回は種目ごとの参加人数を求めていないため各種目の傷害発生率は不明だが、各種目の危険性を考える上で今後の課題として挙げられる。

受傷部位(表6)では膝および足首の傷害発生率が高かったが、この2つには治療期間(重症度)という大きな違いがあった。膝の傷害は女性に多いとされているが、その治療期間の長さ(多くは約半年)からも学生にとっての影響は非常に大きい。こういった傷害が多いということは改めて注意喚起が必要と言える。

本学は体育・スポーツの指導者を育てることを目的に独自のカリキュラム内容となっている。また、多くの学生が部活にも参加している。その結果として、一般的な他の大学(学部)に比べ、傷害発生率が高いと言える。このことを教員(指導者)はもちろん参加者である学生も十分理解し、各自の立場でその予防に取り組む必要がある。言い換えると体育・スポーツに内在する危険性を十分に理解し、安全に配慮したより良いスポーツ活動ができるよう、指導者、参加者自身、周囲の参加者全体でそういった環境づくりにも気を配れるようになるべきである。

【まとめ】

学校教育、体育・スポーツに内在する危険性の理解や活動参加者自身の予防や対策などの注意喚起の一助となることを目的に、本学で発生している傷

害について学生部に提出された学研災申請書(平成24年度から平成28年度の427件)を基に集計を行った。

その結果、傷害発生率は全国平均(学研災加入者)0.57%に比べ、本学は全申請4.8%、保険適用有2.9%と約6~8倍であった。傷害発生状況は授業中(体育実技のみ)で全国平均12%に比べ、本学は全申請29%、保険適用有45%と約3~4倍であった。これらは主な要因として、体育大学の特色でもある参加人数の多さ、競技そのものの難易度や危険性が考えられた。

本学は体育・スポーツの指導者を育てることを目的に独自のカリキュラム内容となっている。また、多くの学生が部活にも参加している。その結果として、一般的な他の大学(学部)に比べ、傷害発生率が高いと考えられた。このことを教員(指導者)はもちろん参加者である学生も十分理解し、各自の立場でその予防に取り組む必要がある。